

# 女性キリスト教禁酒同盟 (Woman's Christian Temperance Union) の成立と発展

栗原涼子

はじめに

第1波フェミニズム運動は1920年の女性参政権成立により終結した。1830年代から始まるこの期の女性運動の顕著な成果が女性参政権であるが、そのほかにも多様な女性の改革組織があり、女性運動があったことを見逃すことはできない。19世紀から20世紀初頭にかけての革新主義時代は、女性運動という観点から見ても大きな変革の時であった。「改革」がこの期の女性史を解くキーワードであろう。改革運動に参加した女性たちは、女性に与えられた伝統的役割を否定するのではなく、女性の道徳的優位性、母性の尊厳を謳い、女性固有の特性を生かすことにより社会を変革しようと努めた。

一方、アナーキスト、社会主義者、グリニッジビレッジフェミニズム等に参加した女性たちもいた。性革命を含む彼女たちの思想は時代をはるかに凌駕したものであり、現代でもその輝きを失っていない。しかし、当時の社会はそれらを受容せず、彼女たちの革命的試みは1920年代にはほぼ消滅した。

この期に功を奏したのは、男女の平等や人権を主張するのではなく女性としての役割を強調しながら、男性と社会を説得するやり方であった。しかし、女性が差異に基づく改革を行うことで、社会、文化、言語等に新たな意味が加わった。たとえばフィーメール・サポート・ネットワークと呼ばれる女性同士の連帯が生まれ、男性のみを指す単語にも疑問を提起した。従って、女性による改革運動を単に保守的な男性が作成した法や習慣に追従した体制的運動と捉えることは正確な見方ではなかろう。この改革運動

内の革新性は女性キリスト教禁酒同盟に顕著に読みとることができる。

女性キリスト教禁酒同盟 (WCTU) は女性による改革運動の代表的な組織である。とりわけフランシス・ウィラードの後期の活躍は革命的でさえある。本論では、WCTUの成立に至る背景、女性十字軍の結成、WCTUの設立、WCTUの理念と初期の思想的背景について考察する。

## 1 WCTUの成立に至るまで

アメリカにおける禁酒運動の興隆期は2期にわけられる。第1期が1850年代であり、すでに、1833年までに全米各地で禁酒組織が結成され、州単位の禁酒法も確立している。アメリカ禁酒同盟はこの年に設立され、その会員数はおよそ百万人とされている。南北戦争前の1850年代初頭、禁酒運動は第1のピークを迎えた。この結果、禁酒法が成立した州も多くあり、飲酒量は激減した。1840年代以降、禁酒運動に参加する女性が増加した。飲酒は家庭を崩壊するものであり、女性の道徳性がこの悪習を救うとする意図で節酒の娘たち (Daughters of Temperance) が結成された。1840年の会員数は約3万人である。道徳的観点からの禁酒のみならず、禁酒法成立へ向けての政治的活動は1850年代に生まれた。1852年、スーザン・B・アンソニー (Susan B. Anthony) はニューヨーク州禁酒協会を創設した。ニューヨーク禁酒大会において、女性は発言権を持たなかったが、大会に参加し、そこからさまざまな手法を学ぶことは可能だった。

服装改革、ブルーマーススタイルで著名なアメリア・ブルーマー (Amelia Bloomer) はもともと禁酒運動家であった。1852年、彼女は禁酒運動は新しい女性運動を形成するであろうと予測した。1彼女は「女性の権利と女性の過ち」と題された演説の中で、代表なしの課税について現行法を批判しているが、男性を直接には糾弾していない。彼女は、即時変革という

作戦を取らなかった。また、クラリナ・ホワード・ニコルス (Clarina Howard Nichols) は Wisconsin 州女性禁酒協会主催の 1853 年の演説の中で、女性が男性の飲酒により被害を受けている事実について語り、女性は権利は必要としないが、希望は抱いていると論じている。2 女性の領域の概念を巧みに利用したこのスピーチは、実はラディカルな要求を内包するものであったといえる。温和な手法や言葉を用いて徐々にではあれ革新的な変化をもたらすやり方である。また同協会会長のオストランダー夫人 (R. Ostrander) は、女性は自らの領域を越えて男性的になることはないとし、禁酒について活動する権利は女性的なものに属すると論じている。

エリザベス・ケイディ・スタントン (Elizabeth Cady Stanton) とスーザン・アンソニーは 1853 年に禁酒組織を離れた。アンソニーは、禁酒組織は女性の権利という原則を受け入れないであろうと弾じた。彼女たちは女性の権利は政治的問題であると捉え、道徳に訴えようとする禁酒運動家と袂を分かった。スタントンは投票権を得ることができなければ運動の意味はないと考えた。アメリア・ブルーマーは 1874 年、WCTU 設立時、その会員となった。彼女は離婚法改正を支持し、女性と子供の権利を重視した。1853 年 9 月、世界禁酒大会がニューヨークで開催された。女性はメンバーから除外されていたが、男性のみの大会を「半数の世界大会」と皮肉って、女性たちは別の会議を持った。この会議で、アルコールによる犠牲者のためのアピール、女性の公的参加権、男女平等の推進等が論じられた。このとき、ニコルスは男性が女性や子供を保護していない事実を指摘し、法律の欠陥についても言及した。子供の権利を盾に取ることによって、彼女たちは巧みに男性の批判をかわし、説得的な議論を展開した。

19 世紀、飲酒は生活に必要不可欠なものとされていた。安全性の少ない水、高価な牛乳に比べて、酒は手に入りやすく、また日々の過酷な労働を支えるものとされた。医学もまた飲酒を奨励した。従って、南北戦争後に

は再び酒の消費量が増大した。飲酒は政治とも深く関連している。酒場経営者や製造業者と政治との癒着は各地で存在した。つまり、飲酒は単に個人の問題であるのみならず、社会的政治的問題であった。

禁酒運動の第2の興隆期は1870年代である。女性が積極的に参加した理由はそれがまさに女性の問題であったからである。アルコール中毒の夫は妻子を虐待した。1875年、全国女性参政権協会(National Woman Suffrage Association)の大会の席上、スーザン・アンソニーは女性こそが飲酒者の被害者であり、このような飲酒者である夫に隷属しなければならない妻の法的地位について鋭く言及している。3 実際に1850年代までに成立した女性の財産権法も完全なものではなく、裁判所の判決が女性自身が得た収入をも夫のものとする提示が多かった。1900年になっても、37州で女性は子供の養育権を持たなかった。

飲酒による夫からの暴力に対し、女性は家庭を守る責任を持つ性として対抗した。禁酒運動は女性特有の役割を遂行するためのものであり、道徳的な説得という手段は私的領域を司る女性にふさわしい行為であった。WCTUの運動は安全であり、伝統的役割を逸脱しない現実的なものであった。女性がこの期に禁酒運動に大量に参加した土壤に、既存の組織である教会に女性が集まり、教会を中心としたネットワークが既に形成されていたことにある。WCTUは主にプロテスタントの教会に通う女性によって構成されている。彼女たちは活動を行うための十分な時間があった。その背景には、都市化、工業化により中産階級の女性たちが余暇を利用して改革へ目を向ける余裕を持ったことが挙げられる。アイリーン・クラディター(Aileen Kraditor)によれば、19世紀後半にアイルランド系移民者が入植し、メイドとして働くようになった結果、中産階級白人女性の余暇が急増したということである。4

WCTUは1874年、全国組織として設立された。WCTUは当初、

穏健な組織として、家庭での役割を女性の領域として受け入れてはいたが、家庭外での社会的貢献を模索していた全米の中産階級白人女性を魅了した。

19世紀後半の社会変化がこれに寄与した。第1に、女性が高等教育を受ける機会が急増したこと、第2に、先に述べたように、移民労働者の雇用と技術革新の恩恵により、家事労働が簡素化したこと、第3に子育ては女性にとって今だ最大の仕事ではあったが、産児制限の普及により、中産階級家庭の子供の数が激減したことがある。こうした要因により、女性たちは自由な時間を得たが、女性が働くことへの偏見が多くあった当時、労働という場への女性の参加は困難であった。女性の場は家庭であり、男性の場への参加は社会も承認せず、女性たちも望まなかった。このような状況下で、改革運動への参加は家庭の延長として、女性に適った役割となった。WCTUは、その改革組織の中では最大のものである。保守組織として出発したWCTUも、徐々にその性格を変えていった。

1879年、フランシス・ウィラード (Francis Willard) が会長に就任すると、「家庭を守るための参政権」「何でもやってやろう」という方針が次々と明らかにされ、目標はより政治的なものとなった。1880年代にはその知名度、会員数ともにWCTUは全米最大の女性組織となった。女性の権利を要求するのではなく家庭を守るという大義名分のもとに禁酒運動を推進したこの組織は、初の最大規模の女性運動団体ともなった。1892年までに会費を納入している会員数はおよそ15万人、支部会員を含めると20万人を上回っていることからその規模の大きさが伺われよう。ちなみに1893年の全国アメリカ女性参政権協会(National American Woman Suffrage Association)の会員数は2万人であった。WCTUはまた、刑務所改革、8時間労働制の成立、遺棄された子供たちのための施設の設立、保育園や幼稚園の建設、教育への公的支援、女性に対する職業訓練の実施などセツルメント活動に連なるさまざまな活動を展開することになった。以

下、女性十字軍とWCTUの成立について検討する。

## 2 女性十字軍とWCTUの設立

1873年から1874年にかけて、オハイオ州ヒルズボロ (Hillsboro) で酒場や酒店に侵入して事業を停止させようという動きがあった。この仕掛け人が女性十字軍であり、女性キリスト教禁酒同盟 (WCTU) の前進となる動きである。このような運動は中西部の小さな町のあちこちで起こり、さらにはフロリダ、ニューヨークにまで波及した。この運動は短期的なものであったが、多くの女性たちを行動へと駆り立てた。女性十字軍を生むきっかけを作ったのはディオクレシャン・ルイス (Diocletian Lewis) の講演であった。医学を学び、女性が運動や積極的な生活をすることを奨励していたルイスはオハイオ州で何度か禁酒における女性の役割について講演していた。彼の意志を実行に移したのがエリザ・ジェイン・トンプソン (Eliza Jane Thompson) であった。裁判官の妻であり、オハイオ州で屈指の名家の出身である彼女は娘と息子がルイスの講演に感銘を受けたことを聞き、教会で女性たちに行動を起こすよう呼びかける決意をした。十字軍を指揮したのはルイスであった。女性たちはアルコールを取り扱う食料品店、ドラッグストア、旅館、酒場に赴き販売停止の署名を求めた。拒否されると、彼女たちは合意するまで賛美歌を歌い、祈りを捧げた。この試みはおおむね成功した。

3ヶ月後には女性十字軍の活動は250の市町村に波及した。最終的には912の市町村にこの動きがあったと見られている。5初期には女性十字軍は非暴力の抵抗であったため、あまり非難されることはなかった。しかし、時にはビールをかけられたり、暴力による脅しを受けたりすることもあった。そのような場合、女性たちは詳細な記録を取り、法廷に持ち込んだ。同時代の男性は女性たちのこうした行動を重視していない。十字軍

に参加したキャリー・ネイション(Carrie Nation)が数人の独身女性とともに斧を持って酒場に乗り込み、酒のボトルやグラスを叩き割った姿を嘲笑的に描いた絵がまるで女性たちの代表であるかのように残されている。

女性たちが女性十字軍に積極的に参加した背後には、自分たちがアルコール中毒者から暴行をうけていたこと、禁酒活動が女性の領域として認められていたこと、教会の支援があったことがある。女性指導者の中には、すでに奴隷制撤廃運動や南北戦争時の衛生委員会での活動を経験していた者もいたが、ほとんどの指導者は家庭、教会以外の場に出るのは初めてであった。フランシス・ウィラードは公的な場での経験が全くなかった女性たちが一夜にして公的存在になったと後に回想している。

1873年、オハイオ州議会は禁酒問題をめぐって揺れていた。この時期、酒類製造業者、酒場経営者たちは酒類の取引に関し、州の許可を得ようと必死であった。1874年、議会は許可を認めなかったが、この決定を強制する州憲法は否決された。女性には政治に参加する権利はなかったが、この身近な問題に対し、無関心ではいられなかった。1870年代までに教会や社会改良組織の中で十字軍が結成され、1873年以前に女性の連帯が成立していたと考えられる。1883年、マーガレット・パーカー(Margaret Parker)はWCTUの機関誌「ユニオン・シグナル」(Union Signal)の中で、十字軍はアメリカの禁酒運動の中で女性の役割を一新させた一大事件であり、アメリカ社会を変革したとも述べている。6公の場で話をし、行動し、指揮することは家庭の中にあるべき女性の役割を越えていたが、その目的が女性にふさわしいものであったため、攻撃的とはならなかった。一方で、十字軍は女性参政権につながる運動であったと見ている同時代人も多かった。7

フランシス・ウィラードは十字軍の成果を4項掲げている。第1に、十字軍は宗教のセクトを越えて連帯し、その結果、アメリカのプロテスタン

ト諸宗派が強固になったこと、第2に女性が家庭の外に出た結果、貧困などの社会の現実を知り、禁酒運動が広い目的をもつ社会運動として成長したこと、第3に市民としての責務を果たすため女性参政権が必要であると認識したこと、第4に中産階級の女性が余暇を有効に使う方法を知ったことが彼女が指摘した成果である。8 保守的な女性が目的遂行のために彼女たちにとっては革新的行動を取った点が十字軍の特徴である。そして、男性も教会も、彼女たちの目的が道徳的であったためそれを批判せず、むしろ尊敬に値すると評価した。十字軍の指導者は上流階級の女性であり、自分たちの持つ高い道徳性が社会に好影響を及ぼすと信じていた。参加者たちも男女平等や女性参政権のような革新的運動とは一線を画するものとして、禁酒運動を受け入れたが、女性が集団的な行動を起こしたこと自体改革であり、フェミニズムへ連なる第1歩であった。

### 3 禁酒から政治へ

女性十字軍の活動を経て、全国各地で女性たちは組織を結成し、行進し、デモを行い、酒場に圧力をかけ、個々の飲酒者を教育し、行政に禁酒法制定へ向けて働きかけた。活動は道徳的なものから、より政治的なものへと変質していく。全国女性キリスト教禁酒同盟(WCTU)は1874年11月18日、オハイオ州クリーブランド(Cleveland)で結成された。この日、最初の大会が第2長老派教会で開かれた。16州の代表として135人の女性が招かれた。全体の参加者はおよそ300人とされている。男性は会員としてではなくゲストとして招待された。WCTUは会員を女性のみとし、女性の強力なリーダーを生むことに成功した。1874年の大会ではラム酒販売業者からの選挙権の剥奪、アルコールを医療に用いることを禁止することなどを含む極端な決議に関しても議論されたが、それらは否決された。一方、WCTUは全国組織であったが、政治的活動に関しては地



域性が濃厚であった。中西部、西部のポピュリズム (Populism) の影響が大きかったと考えられる。酒場を攻撃することにより、WCTUの女性たちは民主党政権とそれを支える移民者勢力を批判していたと言えよう。

会長選には9名が候補者として指名された。その中にはシンシナティ十字軍で活躍しオハイオ州のバプティスト伝導協会の役員も努めたアビー・フィッシャー・レアヴィット (Abbie Fisher Leavitt)、メソジストホーム伝導協会の創始者で機関誌「クリスチャン女性」の編集者であるアニー・ウィテンマイヤー (Annie Wittenmyer) がいた。第1回の投票の結果、2人は同じく31票を獲得、第2回の投票でウィテンマイヤーが会長に当選した。次期会長となるフランシス・ウィラードは記録担当書記に選出された。WCTUは女性参政権組織と異なり、教会やマスコミからも支持された。アルコールが家庭に与える影響が多いこと、女性が家庭内で道德、宗教性を向上させる役割を担っていることを考慮したとき、WCTUの活動はまさしく女性にふさわしいものとされた。ウィテンマイヤーは1877年の大会の席上、次のように述べた。

我々は世界の女性を偉大にして困難な運動へ導くべく神に役割を与えられた。この町のそして他の土地の幾千人もの同胞が希望と期待を持って我々を見守っている。飲酒という制度は世界中の女性の共通の敵である。我々が始めた計画はすべての文明国の女性により熱心に進められていくであろう。あらゆる道德改革の達成は大部分、女性の力にかかっている。我々の進退が千年の栄光へ向けての世界の進退そのものとなるであろう。……

我々は祖国と神を敬愛しているがゆえに、我々にこの重要な機会を真実のものとさせたまえ。9

ウィテンマイヤーの禁酒に対する関心は主に宗教性に根ざしていた。彼女は個々人に禁酒を促し、酒類製造業者に対しても道德的見地からの説得を

試みた。キリスト教への忠誠、罪の意識の喚起を促したのである。

WCTUの中心的人物として、そしてWCTUの発展の立て役者として、前述したフランシス・ウィラードの名を忘れることはできない。ウィラードは1879年から1898年までWCTUの会長を務め、その発展と拡大に尽力した。組織力と統率力を兼ね備え、彼女は地方の女性たちを結集させ、WCTUを巨大な組織へと成長させた。1880年代になるとウィラードは全米にその名を知られた女性となり、WCTUは最も知名度の高い女性団体となった。ウィラードは他の禁酒運動家と異なり、十字軍を経験していない。彼女は教育界で著名であり、1873年にノースウェスタン (North Western) 大学女子部部長、それ以前は前進のエヴァンストン (Evanston) 女子大学学長を歴任している。彼女は戦闘的ではあったが、現実主義者であり、WCTUを闘いの武器であると捉え、そのメンバーを同胞と考えた。彼女は当初、参政権運動のようなラディカルな運動には反対であった。1873年10月に開かれた女性議会の呼びかけに彼女は賛同した。この女性議会は実質的にはスーザン・アンソニーやエリザベス・ケイディ・スタントンの率いる参政権運動を批判したものであり、この会議から「女性の進歩のための協会」が生まれた。ウィラードの関心は女性運動ならびに女性の問題と幅広かった。10従って、禁酒は目的というより手段にすぎなかった。機を見て、彼女は女性参政権支持を表明する。1876年、彼女は飲酒による被害から「家庭を守るため」の参政権を支持した。

WCTUは1870年代に1200の地方支部を持ち、2万7千人の正会員を擁する組織となった。オハイオ州を筆頭に西部、中西部でとりわけ活動が活発であった。その活動の中で注目すべきもののひとつが刑務所改革である。女性の囚人は圧倒的に売春婦が多かった。WCTUの女性たちは刑務所委員会を結成し、売春婦を姉妹であるとし、女性のための特別な

施設を作るよう要望した。1878年の会議では性的二重規範を否定し、女性の売春を禁止する法を施行することを提言した。11 WCTUはほかに、日曜学校で禁酒に関する教育活動を行い、出版物を発行した。1879年になると、請願という政治的行為が重要な活動の一環となった。個々人の道徳的意志に頼るのではなく、禁酒法制定に向けて議会に働きかけることが重要と認識されるようになったのである。

1870年代のWCTUを担った2人の女性、ウィテンマイヤーとウィラードとの間の見解の相異は1876年、合衆国建国百年に際して開催された女性国際禁酒会議 (Woman's International Temperance Convention)の折により鮮明になった。2人の相異は女性参政権の問題をめぐって顕著に現れた。この年、ウィラードは家庭を守るための参政権を主張した。女性の道徳性という美德を否定するのではなく、その美德を社会全体に広めるために参政権が必要であるとの発想である。この家庭の保護の概念は1890年代には限定参政権の要求と結びつき、1900年代には移民排斥の思想に連なるものである。ウィラードは女性国際禁酒会議で参政権支持宣言を行うことを試みた。このことが、女性国際禁酒同盟会長、マーガレット・パーカー (Margaret Parker)の知るところとなり、パーカーはスーザン・アンソニーにウィラードの参政権支持を伝えた。アンソニーはウィラードを讃える手紙を送った。12 ウィラードはフィラデルフィアにおける女性会議で「家庭を守るため」の参政権を宣言した。13 「家庭を守るため」というこのスローガンはとりわけ保守派の人たちを説得するために有効であった。参政権はひとつの目標であった。しかし、その政治的要求を正当化するためには、効果的な宣伝が必要であった。「家庭」という女性の聖域を守るためにこそ女性は公的場に参加する必要があるという論理はWCTUの根幹にあった。ウィラードはこの論理を巧みに利用し、公的領域の中に参政権を取り入れた。ウィラードが重視したのは理論以上に戦略であっ

た。

1876年、イリノイ州で開催されたWCTU大会において、ウィラードは会員を説得するために禁酒と参政権の関係について保守派を刺激しないような柔らかいトーンでの決議を提出した。

決議—私たちはアメリカの母、そして娘たちが家の近くにあるラム酒販売店のドアを開けておくべきか閉ざすべきかについての決定に対し、意見を持てる日が早く来るために祈り、働くものであります。14

しかし、この決議は大きな反発を招いた。多くの女性たちはそれがたとえ地域レベルのアルコール販売に関する決定権に限られていたとしても投票が女性にふさわしい行為であるとは考えなかった。禁酒と参政権を結びつけることは、社会一般、そしてとりもなおさず教会の信頼を失うことになるとWCTUの会員は危惧した。それに対し、ウィラードは家を守ることは女性の責任であると強調した。「家庭の保護」という語句をウィラードは繰り返し使用した。

「家庭の保護」は8州のWCTUにより既に支持された運動に与えられた一般的な呼称である。その目的は21歳以上のすべての女性に参政権を保障することであり、それは強い酒の法的取引から生ずる破壊から家庭を守るひとつの手段である。・・・確かに、次のように述べることは偏狭な見解である。すなわち、「酒場の主人に酒を売らないように嘆願することは女性らしいが、販売を非合法化するよう施政者に願い出、販売を妨げる権利を私たちにあたえるように願うことは女性らしくない」と。15

1877年、全国大会において地方レベルで女性に参政権を与える決議がなされた。WCTUが最も力を入れたのは限定参政権の要求である。教育機関の代表を選ぶ投票権は家庭の延長であるとして、とりわけ強く求められた。カンザス州は1861年、ミシガン州、ミネソタ州は1875年

に限定参政権を得ている。1890年までにこの権利は19州において与えられた。WCTUは州レベルの参政権獲得に尽力した。1878年から1879年にかけて、ウィラードはイリノイ州で家庭を守るための参政権を求めたが失敗、一方、メアリー・ライブモア (Mary Livemore) は1877年、マサチューセッツ州で女性参政権を支援するようWCTUに働きかけた。

ウィラードが参政権支持を表明した頃、全国女性参政権協会 (National Woman Suffrage Association) は自由恋愛主義者であるヴィクトリア・ウッドハルと共闘した。ウッドハルはヘンリー・ビーチャー (Henry Beecher) とセオドア・ティルトン (Theodore Tilton) の妻エリザベス (Elizabeth) との関係を自ら発行する新聞にスキャンダルとして取り上げ、ビーチャーが自由恋愛主義者であると認めよと主張した。この結果、ウッドハルはコムストック法により猥褻罪で捕らえられ、ビーチャーは無罪放免となった。ウッドハルが結婚が聖域であるという考え方そのものを否定し、スタントン、アンソニーらも結婚、離婚制度の改革を論じていたとき、ウィラードが唱えた家庭こそ安全に、そして強固に脅かされることなく守られるべきであり、そのためにこそ参政権は必要であるとする考え方は効を奏した。ウィラードは権利として参政権を要求したのではなく、飲酒の害から家庭を守るための手段としてこれを求めたからである。

1877年11月3日、WCTU第6回大会がインディアナポリスの第1バプティスト教会で開催された。この席で、会長選挙が行われ、99票対40票でウィラードがウィテンマイヤーを破った。ウィラードの当選がWCTUの性格そのものを変えたか否かについては異論のあるところである。女性十字軍も手段において保守的であるとはいえ政治的な行動であると考えられる。ウィラードの女性参政権案も「家庭を守る」という目的において保守的である。19世紀後半の女性運動は改革運動であり、WCT

Uは改革を担う組織の中枢にあった。国家や教会との対決を避け、みごとな話術と戦術により社会に浸透し、既存の価値観を覆すことなく目的を達成する手法においてWCTUはすぐれていた。

1879年に会長になったウィラードの周囲には優れた人材が集まっていた。1880年から1893年まで通信担当書記を務めたキャロライン・ブエル (Caroline Buell)、1878年から1893年まで記録担当書記を務めたメアリー・ウッドブリッジ (Mary Woodbridge)、ほかにリリアン・ステイブンス (Lillian Stevens)、エサー・プフ (Esther Pugh)、アンナ・ゴードン (Anna Gordon) からも忘れることはできない。ウィラードとブエルを除く中枢部にいた女性たちは中産階級の富裕な家庭の出身であった。WCTUが世間の評判を勝ち得た理由のひとつに指導者の個人的イメージがある。ウィラードは「女性的な」組織を作るべく努力し、社会改革に「女性的な」技術を用い、自己犠牲と献身をいとわないと女性というイメージを大衆に与えた。飲酒を悪とするよりむしろ、酒に費やす膨大な費用を教育や食料に使うことを是とし、彼女は飲酒による犯罪について大衆に訴え、家庭を守ることの意義をスピーチ、新聞等で説いた。

ウィラードが述べたごとくWCTUは女性の理想像を再構築する以上の仕事をしたのである。1833年に全米初の男女共学の大学となったオーバーリン大学の演説コースは男女別であり、女性は自分でスピーチをすることはできず、教授による代読であった。1858年には自分の文章を読むことは許されたものの、一般の大衆の前で演説することは禁止されていた。WCTUは出発時から女性の公的領域への参加を奨励し、女性に演説の方法を教育する組織としても機能していた。WCTUの指導者の多くは大学教員であり、ウィラードは演説法を講じていた。彼女は「公的会合の持ち方」というリーフレットをも出版している。その中で彼女は「女性らしさが第一です」と書いている。道徳的、女性的な演説方法を用いることによ

り、聴衆を安心させ、命令調、説得的話法を避け、自らの経験、エピソードを加えることが大切であると彼女は強調した。ウィラードは服装にも留意した。ドレスやスカートはWCTUのメンバーのデザインであり、その記章である白のリボンは純潔と平和を意味した。また、WCTUの会合は宗教的雰囲気を保つよう気遣われ、国家への忠誠を示すため国旗も掲げられた。女性たちの手作りの手工芸品も会場に展示された。

1870年代、WCTUはウィラードという強力なリーダーを得た。社会に対しては保守性を保ちつつ、WCTUは参政権を含む革新的な問題も取り上げ、しだいに政治的にも活発な組織へと発展していった。禁酒をその活動の中心に置くことで自らの立場を正当化しつつ、WCTUはその活動の舞台を徐々に拡大していったのである。

#### むすび

本稿ではアメリカにおける禁酒運動と女性運動のかかわり、とりわけ禁酒運動の発生と女性十字軍、女性キリスト教禁酒同盟(WCTU)の成立についての考察した。WCTUは保守的組織として出発した。国家、教会、男性そして敬虔なキリスト教徒である女性たちの共感を得るような手法とレトリックを使用し、WCTUの活動は社会に浸透し、組織は拡大した。改革という手法はこの期の女性運動を支えるものである。WCTUの方法はみごとに成功したと言える。1880年代以降のWCTUの活動については稿を改め、論じることとする。

#### 注

1 Bloomer, D. C. Life and Writings of Amelia Bloomer 1895 New York : Schocken, 1975, 85-86

2 Stanton, Elizabeth Cady, Susan B. Anthony, and Matilda Joselyn Gage eds.

History of Woman Suffrage Vol I 1881. Rochester :Charles Mann, 1889, 182

3 Kraditor, Aileen Up from the Pedestal:Selected Writings in the History of American Feminism

Chicago:Quadrangle Books, 1969, 159-61

4 Kraditor, 14

5 Gordon,Elizabeth Putnam, Women Torch Bearers:The Story of the Women's Christian Temperance Union Evanston:National Woman's Christian Temperance Union Publishing House,1924, 9

Blocker, Jack K., "Why Women Marched:The Temperance Crusade of 1873-74,"paper read at the annual meeting of the American Historical Association, December 28, 1977, New York

6 Union Signal ,December 20 1883, 6

7 このような見方をしている同時代人にマーク・トウェイン(Mark Twain)、メアリー・ライブモア(Mary Livemore)、ヘンリー・ブレア(Henry Blair)等がいる。

8 Wittenmyer, Annie, History of the Women's Temperance Crusade Philadelphia:Office of the Christian Woman, 1878

9 Minutes of the Woman's National Christian Temperance Union Annual Meeting, 1877 Cincinnati: A.H.Pugh 1877, 12

10 Carpenter,Matilda Gilruth The Crusade:Its Origin and Development at Washigton Court House and Co.,1893, 84-85

11 Minutes 1878 Convention, 105-9

12 Anthony to Willard , September 18,1876, WCTUseries reel 30

13 Willard , Francis Glimpses of Fifty Years: An Autobiography of an American Woman reprinted New York :Source Book Press, 1970, 351

14 Dillon, Mary Earhart , Frances Willard:From Prayers to Politics



Chicago:University of Chicago Press 1944, 153

15 Willard ,Frances , Home Protection manual, New York:The Independent  
Off.,1879, 7